



Ensemble Wits

第8回定期演奏会

2009年10月11日(日) 13:30開場 14:00開演

杉並公会堂 大ホール

Ensemble Wits 第8回定期演奏会

指揮：尾崎洋

ジェルヴェーズ

フランスルネサンス舞曲集

ドビュッシー

小組曲

1. 小舟にて

3. メヌエット

2. 行列

4. バレエ

ラヴェル

ドウルシネア姫に心を寄せるドン・キホーテ（字幕付き）

（Bass solo 鈴木慶彦）

休憩（15分）

サンサーンス

死の舞踏

（Violin solo 鈴木理紗）

ラヴェル

マ・メール・ロワ バレエ版（字幕付き）

前奏曲

第3場 美女と野獣の対話

第1場 紡車の踊りと情景

第4場 おやゆび小僧

第2場 眠れる森の美女のパヴァーヌ

第5場 パゴダの女王レドロネット

終曲 妖精の園

今回のプログラムは全てフランスの作曲家が書いた曲で統一しました。曲調もいわゆる「格調高い貴族のための曲」というよりは、もっと世俗的で、当時の人の環境を表したものや生活慣習に音楽を近づけたいという作曲家の気持ちが込められているものを集めています。たまにはこんな観点からクラシックを聴くのも面白いのではないのでしょうか。本日はごゆっくりとお楽しみください。

Solist



鈴木理紗 / ヴァイオリン

Suzuki Lisa / Violin

東京都出身。幼少時よりヴァイオリンを学ぶ。幅広い活動を経て、2004年にEnsemble Witsのコンサートマスター（コンマス）に就任。2006年に長崎に転勤となるが、度々東京-長崎間を往復する気合を発揮し以降もコンマスに留任。現在は東京に復帰。

確かな技術力と、独特の語彙やたとえ話を用いた指導法が持ち味。たとえ話の効果はともかく、Witsの練習が一味も二味も違ったものになっている要因は、彼女によるところが大きい。また、求心力にも長けた人物であるため、彼女に勧誘されてWitsに入団した「鈴木チルドレン」も少なくない。(Vn. 木村)



鈴木慶彦 / バリトン（バス）

Suzuki Yoshihiko / Bariton(Bass)

大学は経済学部を卒業。卒業後アメリカ転勤となった際に、レッスンを数多く受け歌に没頭。帰国後アカペラグループ「アリババと15人の盗賊」に所属。近年では多忙を極める中、シューベルト「冬の旅」、ヴェルディ「仮面舞踏会」、他にも数々のリサイタル等、幅広い活動を続けている。

公式Webサイト <http://www2u.biglobe.ne.jp/~Gabriel/>

本業は高圧ガス企業の社長。今回は指揮者尾崎の溶接ガス関係のつながりで、オーケストラと歌との共演が実現。通称パートタイムシンガーのガブさんです。Witsメンバーもみな本業は違いパートタイムプレーヤーですので同じですね。鈴木理紗とは苗字は同じですが親戚ではありません。(Cond. 尾崎)

Program Note

ジェルヴェーズ：フランスルネサンス舞曲集

Claude Gervaise : Old French Dances

作曲：16世紀中頃

演奏時間：約10分

クロード・ジェルヴェーズ (Claude Gervaise, 1540年以前 - 1558年以後) はルネサンスのフランスの作曲家、編集者、編曲家である。彼はルネサンス期の作曲家としては珍しく宗教音楽を全く書いておらず、その作品はシャンソンや器楽作品(舞曲)など世俗的なものが主である。彼の舞曲はメロディーが明快でわかりやすくどこか親しみやすい雰囲気があり、リコーダーやギターなどの器楽アンサンブルでしばしば編曲されている。(フランスの近代作曲家プーランクはジェルヴェーズの舞曲集からいくつかを取り上げ、「フランス組曲」として独自にアレンジしている。)

今回の演奏会では、金管アンサンブルとして編曲されたP・リーヴ編の舞曲集から「アルマンド」、「ガイヤルド」、「パヴァーヌとガイヤルド」、「3種のブランル」の4曲をお送りする。
(Tb. 秋本)

ドビュッシー：小組曲

Claude Achille Debussy : Petite suite

作曲：1907年

演奏時間：約15分

小組曲を作ったのはドビュッシーとビュッセルである。と言われても「ビュッセル? 誰だ、そいつは」と、ほとんどの人が思うであろう。この曲は元々ドビュッシーがピアノ連弾曲として作曲したが、後に彼の友人であり作曲家でもあるビュッセルによって今日広く演奏される管弦楽版に編曲された。

そんなこの曲を有名にした立役者と言っても過言ではない彼だが、なんと101歳の長寿を得て1973年まで存命されており、生涯を通してフランスで音楽教師として活躍。弟子からは高名な作曲家を何人も輩出し、奥さんもソプラノ歌手で1972年まで存命だったという、調べてみると色々凄いな方だった。今日はいつも前面に出るドビュッシーの名前を忘れ、そんな「ビュッセルの小組曲」としてこの曲を味わってみるのも一興かもしれない。
(Cb. 藤田)

ラヴェル：ドゥルシネア姫に心を寄せるドン・キホーテ

Joseph-Maurice Ravel : Don Quichotte à Dulcinée

作曲：1933年

演奏時間：約7分

1曲目「空想的な歌」はドン・キホーテが妄想上のドゥルシネア姫に対して、「姫のためになら何でも出来ます。命も惜しくありません。」といった内容の曲。2曲目「英雄的な歌（叙事詩風の歌）」は大天使ミカエルに聖なる剣の力を求める歌。3曲目「酒の歌」は悲しいことは飲んで忘れようと飲んだくれの歌。以上3曲からなるポール・モラン作詞による連作歌曲である。

元は G.W. パプスト監督の映画「ドン・キホーテ」の劇中歌として作曲した作品であった。しかし制作側が勝手にコンペとしてしまい、作曲家には黙って他にもファリャ、ミヨー、イベールにも同時に依頼。結局採用されたのはイベールのもので、これは映画の中で実際に使われている。この件は訴訟問題に発展したが、一方でラヴェルの曲はコンサート用の作品として発表された。

この後、ラヴェルは進行性脳疾患のため作曲ができなくなり、これが最後の作品となる。
(Cond. 尾崎)

サンサーンス：死の舞踏

Charles Camille Saint-Saëns : Danse macabre

作曲：1822年

演奏時間：約8分

「死の舞踏」は、カツァリスという詩人が作った詩に着想を得てまず歌曲が作曲され、その歌曲を元に作曲された曲だ。元々、死の舞踏とは、ヨーロッパでペストが大流行し、人の身分に関係なく大勢が死んでいく様を絵画で表したものである。曲の発表当時は、「死」が題材というだけでグロテスクなことに加え、Dies Irae（キリスト教における終末思想）を変奏したり、変則的なソロヴァイオリンを入れたり、重々しいテーマの割に奇をてらい過ぎたせいか、あまり受け入れられなかった。しかしその後見直され、今ではフィギュアスケートでも使われるほどに、有名な曲となった。

本日はソロヴァイオリン（死神）をコンサートマスターの鈴木が演奏し、骸骨軍団である他の楽器を率いていく。世にも奇妙な墓場の一夜をとくご覧あれ。
(Vn. 鈴木)

ラヴェル / マ・メール・ロワ

Joseph-Maurice Ravel / Ma Me`re l'Oye

作曲 : 1911 - 1912 年

演奏時間 : 25 分

マ・メール・ロワは、今回プログラムの中にある「小組曲」と同じく、元はピアノ連弾用に書かれた曲である。マ・メール・ロワ（英語ではマザーグース）という曲名通り、曲は子供向けのおとぎ話から、眠りの森の美女、美女と野獣、おやゆび小僧、みどりの蛇が選ばれ、作曲されている。終曲だけは物語から取ったものではないが、この曲集の最後にふさわしい、素朴だが究極の美が表現されている。

特徴的なのはその作曲スタイルだ。ラヴェルは親友であるゴデブスキ夫妻の子供達、ジャンとミミに向けてこの曲を書いた。ラヴェルは子供やおとぎ話が好きで、パーティーなどに出かけても部屋の隅で子供と遊んでいた、という話も残っている。子供に向けて書かれたので、同時に押さえる和音数も少なく、また技巧的にもほとんど難しくないパッセージばかりが使われており、片手でオクターブを押さえる部分すら出てこない。もっとも、彼らにはそれでも難しくて、結局初演は別の子供達が演奏したというオチもある。



紡車の踊りと情景



美女と野獣の対話

ラヴェルはこのように、自分に制限を課して作曲をする、ということを好んでいたようだ。ピアノ曲で一番難しい曲を作ろうとして「夜のガスパール」を作曲したり、1つのメロディーを延々と使い続けるといった制限から「ポレロ」を作曲したりした。近年日本でラヴェルの人気があるのは、このようなストイックさが、我々日本人にもどこか通じるところがあるからだと思う。この曲の制限でも表現の幅は削られてしまっているが、逆にそこで生まれた別の表現方法が、我々に新たな発見と驚きを与えてくれる。

ラヴェルは後にこの曲をオーケストレーションし、更に友人のジャック・ルーシェから依頼を受けてバレエ化までしている。彼は1つの連続したお話として台本を自分自身で作り、曲順入れ替えて序曲や間奏曲も作った。



おやゆび小僧

本日私たちが演奏するのは、このバレエ版である。ラヴェルのオーケストレーションには、「展覧会の絵」やその他の自作曲を見ても素晴らしいものが多く、この曲に関しても多分に漏れず彼の才能が遺憾なく発揮されている。特に弦の使い方は特徴的で、効果音のような音を出す特殊奏法が多く、この一連の物語の雰囲気を出す一番の肝となっている。



パゴダの女王レドロネット

音楽にあわせて踊ってくれるバレエ団もないにもかかわらず、バレエ版を演奏するのは、我々にとっても大変な冒険である。なぜなら、物語が分からなければ、曲のおもしろさも半減してしまうからだ。そこで今回、私たちは、ラヴェルの作成した台本を元に字幕を作り、物語を曲に合わせてスクリーンに表示することにした。なにぶん初めての試みなので、この演出が聴衆であるみなさんに受け入れられるのかどうか、正直不安なところがある。

しかし、同時に私たちは、私たちの音楽と文字によって表現されたマ・メール・ロワが、皆さんの頭の中で美しい映像として再生されであろうと確信している。なぜなら、人の想像力はすべての既存のものを凌駕するからだ。

我々の演奏が、皆さんの想像力を最大限に引き出して、マ・メール・ロワを楽しみ、感動していただけたら、これ以上の幸いはない。

(Cb. 小林)



終曲 妖精の園

Concert Members

Violin	Cello	Clarinet	Percussion
阿部真理子	今西威史	石井絵美	◇小森葵
☆井田敦子	海野優香	◇小野陽平	庄司朋生
植田佳奈	◇須見真樹子		白江美樹
岡寛子	松浦明子	Fagott	廣藤由衣
小川智子	○矢吹克宏	◇高宮雄太郎	
小野崎彩子	○山口祥子	橋谷梨花	Harp (賛助)
加我悠	吉田穰		小野田清香
○木村健太郎		Horn	
佐藤麻美	Contrabass	工藤慶子	Keyboard Glocken
☆鈴木理紗	◇小林正基	◇戸花優希	佐藤至大
長ヶ原初香	○藤田顕次	長井海雄	
手島奏平	安井珠里亜	細田由希	Celesta
寺沢優奈			小林正基
成瀬芙美	Flute	Trumpet	
則武剛士	◇小澤恵	シヴァシャンカラ	Recording engineer
原橋ひろみ	久住俊一	・アカシュ	山口醸二
○森村典子	本間優子	◇田中匠	
山本百合子			☆コンサートマスター
	Oboe	Trombone	○首席奏者
Viola	大野正樹	◇秋本大士	◇パートリーダー
赤池瞳	杉江麻衣	内野歩	
阿萬美江	◇高橋圭子	矢野貴宏	
◇潮見渚	野村明日香		
○西岡崇		Tuba	
寺田亜里紗		大久保一樹	
堀内美穂			

パンフレット作成に当たり、今西威史さんの友人、熊倉藍子さんにイラストを寄稿していただきました。心よりお礼を申し上げます。

Ensemble Wits

楽団名である「Wits」には「ユーモア、知力、理解力、才能」という意味があります。全ての人の心に素直に響き渡り感動できるように、音楽を聴く人へも、演奏家自身へも配慮できる楽団を目指しています。依頼演奏等も引き受けながら、小さくても輝きのあるアンサンブルから荘厳な響きのシンフォニーまで幅広く手掛けることを目標に活動を行なっています。